

筑波大学アメリカンフットボール部の文化と部員のモチベーション

千葉 蓮

本研究では、入部してから現在まで部員のモチベーションがどう変化していったのか、モチベーションが変動したときに人はどう考えどう行動するのかというモチベーションが与える影響やモチベーションの実態を明らかにすることを目的とする。モチベーションが人々の中で果たす役割やモチベーションが下がった際にどういった行動をとるべきなのかが、インタビューを通して明らかにしていく。それらを人々(特に自分の研究と同じフィールドに立つ学生スポーツに励む人々やモチベーションが上手く保つことができずに苦しむ社会人)に提示して、新たなモチベーションについての視点を与えるとともに、調査で分かったモチベーションを上げる1つの手段を提示する。

本研究では、半構造化インタビューの手法をとった。調査対象者は筑波大学体育会アメリカンフットボール部に所属する選手、及びそのOBの12名とし、インタビューを行った。調査期間は2018年の6月から12月とした。また、筑波大学体育会アメリカンフットボール部の夏休みのある1日を参与観察した。

本研究の調査から、以下のことが明らかになった。(1)インタビューを行った12人全員が部活動の雰囲気に対して肯定的に捉えていた。コミュニケーションに関しても学年の垣根なく積極的に行われていた。それらは「チームが学生主体であること」「つくばの環境」が要因である。(2)モチベーションの変遷の仕方に関して、時と場合によって変化するパターンと常に高い位置で保たれているパターンの2タイプがあった。それらは動機付けの仕方によって生まれる差であった。(3)競技自体をモチベーションの要素に考える部員は居なかった。(4)辞めるかどうかを迫られた時、自分がチームに残るためにチームに残らなければならない動機付けをする積極的モチベーションを生み出すタイプと自分を取り巻く環境が原因で部活動を辞める事ができず、辞める事ができないことがモチベーションとなり部に残る選択をする消極的モチベーションを生み出す2タイプが見受けられた。

上記の結果から、モチベーションが部員の中で果たす役割が明らかになった。モチベーションが部員に自身と対話する機会を与える役割だ。部員は試合や練習などでストレスのかかる辛い経験をする。そのような状況下に置かれると、モチベーションが低下し部活動を続ける意義を見失う姿が多く見られた。すると多くの部員は「なぜ競技を自分はしているのか」と過去の経験や感情を、自己対話を通し振り返った。それにより、新たなモチベーションを生み出し以前より活力のある取り組みを行っていた。このように、モチベーションの低下が、部員に思考の機会を与えるのだ。

(指導教員 照山絢子)